

最近思うように身体が動かなくなってきた。79歳なのだからいたしかたないとも思う。がんを患って30数年。その後、糖尿病を併発し、2年前、心筋梗塞で緊急入院をしてステントを2本入れた。自分が死ぬのは多分心筋梗塞ではなからうか。そんな思いがするこの頃である。がんになって長いが、周りには自分の

がんから学ぶ

—がんサロン主宰者が語る—



1937年5月、石川県金沢市生まれ。同志社大学文学部卒。特殊精密機器メーカーの㈱フジキン総務部長兼改革推進室リーダーを経て、1994年3月、1ターンの益田市移住。益田ドライビングスクール合宿型システム作りを依頼される(ガリアの夜明けで放映)。その後、C・T・V創生研究所設立。地域で観光、定住、教育、医療など街おこしを実施。2005年12月、全国初のがんサロン開設。

島根益田がんケアサロン 代表
C・T・V創生研究所 所長 納賀 良一

血尿で通院、早期発見に

闘病の話をしたことがない。今まで生きてきた軌跡はどんなだったろうかと思いい、自分の闘病記をしたためてみたい。今後の生き方と今後の逝き方が見えてくるだろう。

1979年3月、トイレに入っているとき、突然便器が真っ赤になった。初めての経験だったが、2、3日すると血尿はウソのように消えた。自覚症状はまったくない。普通はそのまま放っておくが、たまたま義兄が同じ症状を患った経験があった。それが幸いした。すぐ病院へ行く事を勧められた。それが早期発見に繋がった。

それから10年、毎年のように軽手術(TUR)を繰り返した。7、8回そのたびに会社や仕事仲間に迷惑を掛けたが、毎回1週間程度の入院で済んだ。

毎月の定期検査や膀胱鏡検査・温熱療法(当時の最先端治療)等、細やかなフォローを繰り返しながら治療をしてきた。仕事の都合で大阪から島根県益田市

に住んではからは忙しさに紛れ、定期検査を1年ほど怠っていた。またこの土地では思うような専門病院がなかったことも災いした。

1992年3月、忘れていた事が突然やってきた。血尿がでた。思い出しくもない。最寄りの泌尿器科医院を受診した。即、前回の大阪で受けたのと同様の手術(TUR)を受ける。退院後、抗がん剤(BCG)1週1回×6クルルの注入を受ける。約7週間かかった。多少の副作用を感じたが仕事に差し支えるほどではなかった。

毎年膀胱鏡検査・細胞診検査をしながら、がんに向き合い戦ってきた。これから次の発病時期までが一番病氣(がん)を忘れていた時期だった。その間は痛みもなく、仕事に没頭していた時だったが、まさかこれから起こる状況は予想だにしていなかった。だがいつまでも続かなかった。がんには完治という言葉は通用しない。